

第1回 自校の研修・会議に使える！対話促進スキル向上・オンライン講座
テーマ「高校の特色化・魅力化」

多様な人との対話を通して、 育成を目指す生徒像を具体化していく

答えが1つではない問いに向き合うことが求められている現代。学校における研修や会議においても、参加者が互いの考えや思いを共有する「対話」の重要性が高まっています。

そこで、VIEW next 編集部は、対話型の研修や会議を実現するために必要な対話促進スキルの向上を目的としたオンライン講座を、『VIEW next』高校版の特集のテーマと連動させる形で開催することにしました。

2021年8月2日に実施した第1回は、本誌6月号の特集のテーマである「高校の特色化・魅力化」です。全国各地の学校の魅力化を推進されてきた岩本悠氏、埼玉県教育局の岡本敏明先生、三菱UFJリサーチ&コンサルティングの阿部剛志氏の3人に、高校の特色化・魅力化の方策の1つであるスクール・ポリシーは、自校の教師がどのような対話を積み重ねて策定すればよいのか、そうした対話の場を進行する教師はどんなことに配慮して対話を促進していけばよいのかといった点について、具体例を交えてお話いただきました。

開催概要

日時 2021年8月2日(月) 16時00分～17時10分

形式 オンライン(ライブ配信)

プログラム

- ①『VIEW next』高校版6月号・特集 解説
- ②講師によるトークセッション
「スクール・ポリシー策定にあたっての対話のポイント」
 - ・ 特色化・魅力化を自校で進めていく上で考えるべきこと
 - ・ 教師同士の対話を通じて自校の特色化・魅力化を考える際のポイント
- ③自校の研修や会議で活用できる本テーマのワークシートの紹介

講師 一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム

代表理事 岩本 悠

埼玉県教育局 生涯学習推進課 岡本敏明

三菱UFJリサーチ&コンサルティング

公共経営・地域政策部 部長 阿部剛志



自校の特色化・魅力化を実現するための鍵は、教師同士の「対話」

スクール・ポリシー策定の
出発点は、教師同士で
対話を重ねながら、
自校の課題を整理すること



◎解説
VIEW next編集部
高校領域担当責任者
河野仙一

『VIEW next』 高校版6月号はこちら
▶ <https://berd.benesse.jp/magazine/kou/booklet/?id=5607>

図1 スクール・ポリシーの策定手順の例

スクール・ポリシーの策定手順の例

- (1) スクール・ポリシー策定の中心となる組織の特定
- (2) スクール・ポリシー策定に係るプロセス及びスケジュールの確定
- (3) スクール・ポリシー策定にあたって踏まえるべき情報の整理
- (4) スクール・ポリシーの案の作成及び教職員間での協議
 - ① グラデュエーション・ポリシー
 - ② カリキュラム・ポリシー
 - ③ アドミッション・ポリシー
- (5) 生徒や保護者等の 学校外の関係者との対話
- (6) スクール・ポリシーの策定
- (7) スクール・ポリシーの再確認・見直し

「(3) スクール・ポリシー策定にあたって踏まえるべき情報の整理」と、「(4) スクール・ポリシーの案の作成及び教職員での協議」に今回は着目。

* 中央教育審議会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）」を基に編集部で作成。

『VIEW next』 高校版6月号では、「生徒が輝く学校づくり—高校の特色化・魅力化—」と題した特集を製作しました。「高校の特色化・魅力化」は、本誌が実施した読者アンケートで、取り上げてほしいと要望が多かったテーマであり、中央教育審議会で議論が重ねられていた論点の1つでもあります。

本特集ではまず、文部科学省の担当者と現場の教師との対話を通じて、特色・魅力ある教育課程を実現するために求められている、「各高等学校の存在意義・社会的役割等の明確化（スクール・ミッションの再定義）」と、「各高等学校の入口から出口までの教育活動の指針の策定（スクール・ポリシーの策定）」における課題について整理しました。そこでは、高校の選択理由と進路選択の満足度には相関があり、学校に魅力を感じて進学先を選んだ生徒は満足度が高いというデータを紹介しました。特色化・魅力化の必要性について再確認をするとともに、スクール・ミッションやスクール・ポリシーを、中学生の高校選択の一助とすること、その策定の際には、中学生や保護者が理解しやすい内容にすることなど、スクール・ミッションの再定義とスクール・ポリシーの策定のポイントをお伝えしました。そして、特色化・魅力化の実践事例校から伺った、スクール・ポリシーが策定されていることで教員同士の目線合わせが可能になり、軸を持って教育活動を推進することができるといった本質的な効果や、スクール・ポリシーを毎年見直していく取り組みなどについて紹介しました。本日の講師でもある岩本氏からは、学校の特色化・魅力化において、PDCAサイクルを回し続けることや、評価の結果を次の活動に活かすため、生徒や教師、地域住民とエビデンスを基に対話することの大切さについて語っていただきました。また、特色化・魅力化の推進には、学びの場やプロセスを整えて主体的・対話的で深い学びを引き出す「ファシリテート」、教室外の多様な教育資源を生徒の学びにつなぐ「コーディネート」、限られたリソースを生かして学びの価値を生み出す「マネジメント」の3つの力を教師が持つこともポイントだと教えていただきました。

本日の講座では、6月号の特集のテーマと連動させる形で、自校の特色化・魅力化の方策の1つである、「スクール・ポリシーの策定」に向けた「対話」のあり方や方法、その場をファシリテートする際のポイントについて考えていきます。

中央教育審議会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）」で示されている、スクール・ポリシーの策定手順の例を見てください（図1）。7つの手順のうち、「(3) スクール・ポリシー策定にあたって踏まえるべき情報の整理」と、

「(4) スクール・ポリシーの案の作成及び教職員間での協議」に着目したいと思います。(3)においては、生徒の状況や地域の実情等を整理し、教師間で共有することが求められています。(4)においては、整理した情報を踏まえて、育成を目指す資質・能力に関する方針(グラデュエーション・ポリシー)、教育課程の編成及び実施に関する方針(カリキュラム・ポリシー)、入学者の受け入れに関する方針(アドミッション・ポリシー)の順に策定するとよいと示されています。それらのプロセスで鍵となるのが、「教師全員参画」と「対話」です。

本日の講師の方々には、スクール・ポリシー策定の出発点である情報整理のポイントと、グラデュエーション・ポリシーの作成に向けた対話のあり方や進め方についてお聞きしていきます。

2 講師によるトークセッション「スクール・ポリシー策定にあたっての対話のポイント」

対話で大切なのは、多様な人の参加と安心・安全の場をつくること

教師が主体性を
発揮して取り組み、
多様な人と意見交換を
することが重要

◎講師

一般財団法人地域・
教育魅力化プラットフォーム 代表理事 岩本 悠

2006年から島根県立隠岐
島前高校の魅力化事業に、
15年から島根県教育魅力
化特命官として高校魅力化
に従事。



埼玉県教育局 生涯学習推進課 岡本敏明

2018年、埼玉県教育委員
会から派遣され、隠岐島前
高校に赴任。埼玉県教育委
員会に帰任後、隠岐島前高
校で得た知見を生かし、対
話を通じた問題解決を推進
しながら、高校の地域連携
推進などに従事。



河野 スクール・ポリシー策定では、情報整理と教師間での協議が重要になります。そうした場での対話は、どのように進めるとよいでしょうか。

岩本 大切なポイントは、3つあると考えています。1つめは、策定にかかわる教師が主体性を発揮して取り組むことです。スクール・ポリシーの策定の意味や目的、つまり“why”を自分たちの言葉で言語化し、共有することが大切です。受動的な取り組みになってしまうと、スクール・ポリシーに魂が込められず、それが教師や生徒に伝播し、スクール・ポリシーが形骸化してしまいます。2つめは、策定のプロセスを事前にしっかりと設計することです。年間の授業計画や単元の指導計画と同じで、まずはゴールを設定し、そこから逆算して何をいつまでにするのかを共有しておきましょう。それを踏まえて、策定のための情報を整理していく必要があります。3つめは、そのプロセスにおいて誰が参画するのかを考えることです。生徒だけでなく、PTAや卒業生、地域の自治体関係者など、今後、協働していこうと考えている人たちと、自校をどんな学校にしていきたいのかについて、対話をする機会を設けましょう。そうした人たちに、構想の段階から参画してもらおうことで、その後の協働がより充実したものになるはずですよ。

岡本 私も情報整理における対話のポイントは、教師だけでなく、生徒や保護者、地域の方などの声を聞くことだと考えています。ある高校で教師と生徒が目指す生徒像について話し合った際、生徒の多くが「こうなりたい」という理想像を持っていました。一方、教師は学校の欠点に目を向けがちでした。そうしたギャップを埋めるためには、保護者や地域の方なども対話に加わり、強みを思う存分に出し合うことが重要だと思います。これだけ社会が大き

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング^{たかし}
公共経営・地域政策部 部長 阿部剛志

群馬県で地域のNPOとして、公立高校での探究学習地域連携アドバイザーとして従事。2019年、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業企画評価会議地域魅力化型企画評価部会」の協力者。「高校魅力化評価システム」を岩本氏と協働で開発。



く変わっているのですから、保護者や地域の方にも、「こんな子どもに育てたい」という思いがきっとあるはずです。

阿部 お二人の意見に賛成です。私が目標や計画策定の対話の場を学校以外で数多くデザインしてきた経験からすると、教師だけの対話の場合、関係性が固定しているため、意見を自由に言いにくいようです。例えば、自治体の職員や地元企業の方にも参加していただくとういと思います。そうすれば、様々な視点からの意見が上がり、教師も自校の強みを実感することができ、自分の思いを発言しやすくなるはずです。キャスト選びが重要なキーになると思います。

河野 本日の視聴者からは、「校内での対話が円滑に進まない」という悩みも多く寄せられています。皆さんは、ファシリテーターとして対話を進める際にどのようなことを心がけていますか。

岡本 私は、キーワードやフレーズなど、まずは短い言葉で意見を出してもらい、それを起点に考えを深掘りしていくようにします。例えば、学校の強みとして「生徒が明るい」と挙がったら、「それはどのような場面で感じますか」と問いかけ、徐々に具体化してイメージを共有し、共通理解をはかることを心がけています。

岩本 情報整理の対話では、型通りではなく、自由に意見が言い合える安心・安全な場をつくるのが大切でしょう。例えば、座席は、授業のように全員が前を向いている配置ではなく、机を寄せ合う島型や、参加者が向き合う対面形式にすると、本音を話しやすくなります。お茶やお菓子を用意することも、場の雰囲気や和やかにする方法の1つでしょう。また、「いきなり否定せずに、まずは傾聴する」「絞り込まずに、広げていく」などと、対話の冒頭に、参加メンバーで対話の作法を確認することも重要です。対話の趣旨を共有し、どのようなことを意識して発言すべきなのか、共通認識を図ることを心がけるとよいと思います。

目指す生徒像を深掘りし、参加者間での共通理解を進める

河野 整理した情報を踏まえて、スクール・ポリシーの中でも要となるグラデュエーション・ポリシーの策定に向けた対話を行うにあたっては、どのようなことに留意すべきでしょうか。

岩本 情報整理をするために収集したアンケートやデータなどをきっかけに、対話を進めていくとよいでしょう。その際、例えば「このデータから読み取れる、本校の生徒のよさや強みは何だと思いますか」などと、問題点ではなく、今ある魅力に目を向けるところから始めると、話しやすい雰囲気になります。また、どのような資質・能力を持った生徒を育てたいのかと問うと、どうしても「主体性がある生徒」などと、抽象度の高い表現になってしまいがちです。そういった時は「例えば、どういう場面で、どのような行動ができる生徒をイメージしていますか？」などと投げかけると、自分の言葉で語りやすくなり、具体的な表現となって参加者間での共通理解も進みます。具体的な生徒名を出して語ること

もよいと思います。

岡本 私も、「あの生徒のように育てたい」といった生徒のロールモデルを持っておりまして、どの教師も必ずそうしたロールモデルを持っていると思います。具体的な生徒の姿を思い浮かべることが、育成を目指す資質・能力を言語化する時に役立つはずです。

阿部 育成を目指す生徒像を語り合うパートは一番盛り上がるパートかもしれませんね。参加者が多様であると、様々な意見が上がる分、議論に時間がかかります。そのため、ファシリテーターは、通常の会議や研修よりも3倍くらいの時間が必要になってもよいくらいのスケジュールを組むことが大切です。1回の会議・研修時間に余裕を持つほか、予備の会議・研修日も見込んでおきたいところです。また、年度末までにどうしてもスクール・ポリシーを策定しなければならないといった場合は、「とりあえずバージョン1を作成しよう」という気持ちで臨むとよいと思います。それを次年度以降、改訂していけばよいのです。

岩本 学校の特色化・魅力化とは、各校において多様な人たちが対話をしながらよりよい学校や学びをつくっていく、終わりなき探究のプロセスだと考えています。PDCAサイクルのPにあたる部分がスクール・ポリシーの策定であり、策定したスクール・ポリシーに基づいた教育活動を行い、振り返り、必要に応じてスクール・ポリシーや教育活動を見直していくことが大切です。

河野 岩本さんは、教師の思いや主体性を大事にしながらも、学校の特色化・魅力化の取り組みの成果を評価する「高校魅力化評価システム」を開発されました。どのような思いで、評価システムをつくられたのでしょうか。

岩本 スクール・ポリシーの策定は、あくまでスタートです。形骸化させないためには、目標に対して実際にはどうだったのか、データやエビデンスをもとに対話を通じて振り返り、次の改善や計画につながることを重要です。結果を評価・検証してこそ学びが生まれ、学校が学習し続ける組織に成長していきます。

河野 本日は、ありがとうございました。

今回のテーマにおける対話促進スキルのまとめ

前提

- スクール・ポリシーの策定がなぜ必要なのか、目的を 自分たちの言葉で共有し、教師が主体性を発揮して取り組めるようにすること
- 策定のプロセスを事前にしっかりと設計し、そこから逆算して 何をいつまでに設定するか共有すること
- 生徒や保護者、卒業生、地元の自治体関係者、地元企業の方など、今後協働していきたい方々に、構想の段階から参加してもらうこと

対話の場面

- 対話では、自由に意見が言い合える安心・安全な場をつくること。対話の冒頭に、参加メンバーで対話の作法を確認すること
- 参加者から抽象的な表現が出てきた際には、深堀をして、自分の言葉で具体的な表現をさせ、参加者同士で共通理解をすること